ほうすけクラブ（いなべ市藤原町古田）

農村を楽しみながら皆で地域づくり

里の概要

いなべ市藤原町古田地区は岐阜県大垣市上石津地区と接した三重県最北端の地区。農家４５戸、水田面積約２０ha、地域農業のほとんどが米作の山間集落である。

地区内にある立田小学校とは山村留学やホタルの飼育･観察などの活動を通じて結びつきが強く、農村環境に対する意識が非常に高い地域である。

里づくりのきっかけ

古田地区の一戸当たり水田面積は約５０a 程度。昭和５０年代から兼業農家が増え、それに伴い耕作放棄・後継者不足に悩まされていた。基盤整備をきっかけに、当時の藤原農協（現みえいなべ農協）が約7ha の田を受託した。しかし、農協が合併を機に作業受託から撤退。作り手のいなくなった農地をどう管理するか思案の末、一年間は古田農家組合で営農をするものの、赤字経営となってしまった。農家組合の役員が協議に協議の上、集落の担い手としての「有限会社藤原ファーム」の設立を決め、その代表を近藤氏に依頼した。しかし、古田地区の農地をすべて受託しても２０ha ほど。農地を守るには、加工・販売を経営の柱にすることが必要と考えた近藤氏は平成１２年に餅加工販売所「えぼし」をオープンさせた。

一方、平成１１年には近藤氏の呼びかけで古田地区にグリーンツーリズム委員会を設立。委員会では古田の農地を守る方法として、藤原の豊かな自然を PR し、グリーンツーリズムでお客様を呼び込もうと考えた。そして自治会、農家組合で遊歩道の整備やササユリ・カタクリ等の保存活動などを始めた。

ほうすけクラブは、グリーンツーリズム委員会の活動を引き継ぐ形で平成 14 年に設立された。自治会や農家組合での活動に参加していない地区住民、グリーンツーリズムや地域活性化に興味のある都市住民にも活動に参加をしてもらうことがねらい。

里づくりの経過

平成元年	基盤整備が完了。古田農家組合が設立され、7ha の農地を藤原農協（当時）へ委託
平成 8 年	有限会社藤原ファーム設立。地域農業の担い手となり集落の農地の維持管理を行う。
平成 11 年	グリーンツーリズム委員会設立
平成 12 年	古田農家組合が中心となって散策道の整備、炭釜の復活・ササユリ・カタクリの保存
平成 12 年	餅の加工･販売施設「えぼし」をオープン
平成 14 年	古田地区の有志で「ほうすけクラブ」設立
	農業体験・そば打ち、しめ縄作りなどの体験教室、ビオトープ作り
平成 16 年	グリーンツーリズム大賞受賞
平成 17 年	水車小屋復活
平成 18 年	「農山漁村いきいきシニア活動」受賞

現在の活動

■ 里山の自然観察会
■ 稲刈り、田植えなどの収穫体験
■ 散策道の手入れ
■ そば打ち、しめ縄づくり、炭焼き
■ 遊休農地を活用したビオトープづくり

活動のポイント

■ 集落の農地は集落で守る意識

藤原ファームへ農業経営を委託していても、出合作業は全員が出席。集落も協力して農地を守っていこうという雰囲気がある。

■ 農業に根ざした生活・文化を守り、農村という地域全体を守っていこうとしていることや、地域住民が同じ目標を持ち活動している点。

そば打ち、炭焼き、陶芸、かご作り・・・昔は、日常生活として営まれていたこれらの技術も、集落の里山や環境を守ることにつながっている。農を守っていくということは、農地だけでなく生活に根ざした技術や文化も守っていくことである。

また、藤原ファームは現在集落の農地の９０%以上を経営、地域の農業を守っている。ほうすけクラブや地域住民は、農村文化の伝承と農村環境の保全活動を通じて古田のよさを再発見し、都市住民に発信している。その結果、「えぼし」には年間3万人が訪れるほどになり、リピーターも多くなった。古田地区の農村環境はこれらが連携することにより守られている。また、地区の取り組みは時代を先取りして進められている。平成19年度から実施される農地･水･農村環境保全向上事業における目的やその活動内容はすでに古田地区では定着したものになっている。事業をうけ、ほうすけクラブ、農家組合、自治会、老人会、青壮年部、子ども会と農業者で「レインボー古田」を結成し、一丸となった取り組みへと発展している。

苦労話

古田農家組合は、「ほうすけクラブ」ができる以前から、里山の保全活動などを通じてグリーンツーリズムの取り組みを行っていた。しかし、地域活性化の成果は目に見えるものではない。平成１６年にグリーンツーリズム大賞を受賞するまではどこに向かって活動を続けているのか不安を持つこともあった。グリーンツーリズム大賞の受賞はこれまでの活動が評価され、これからの活動を動機づける非常に良い機会となった。

将来の展望

農村環境が、今後の集落の存続を左右する時代になった。古田地区でも、ほうすけクラブの活動内容を充実させ、また多くの古田ファンを作り、ほうすけクラブに参加してほしいと考えている。

連絡先

ほうすけクラブ
住所：〒511-0521　いなべ市藤原町古田1162　電話：0594-46-2144
URL：http://www15.ocn.ne.jp/~eboshi/

ふるさと味工房アグリ（玉城町）

農業の町「玉城町」の魅力を100%発信する「産直施設」で元気な農業を応援。

里の概要

玉城町は平坦な地形と温暖な気候に恵まれ、水稲を主体に畜産、果樹等の複合経営が盛んな農業の町である。玉城豚、水稲、イチゴ、柑橘、柿、梨、タバコ、切り花（菊）など多種多様な農畜産物が生産され、イチゴ狩りやメロン・ブドウ直売の「（有）玉城ふれあい農園」や養豚経営など、６つの農業法人があり、ほ場整備も98%が完了している。

交通アクセスが良く優良企業が立地しているほか、里山など豊かな自然環境にも恵まれ、人口も増加している。近年、都市化の影響で農業の兼業化が進み後継者対策が課題となっている。

里づくりのきっかけ

昭和55年に玉城町の若手養豚農家６軒が、玉城産豚肉の品質向上のため、自家配合の飼料工場を共同で整備。その後、玉城産の豚を売り出そうと、スーパーでの販売を始めた。経営を順調に伸ばしていく中、「ソーセージ等の加工と産直をやりたい」と夢を持つようになった。

その頃、玉城町は、産直施設の立ち上げを視野に入れ、野菜類などの青空市を始めていた。産直施設の計画に際し、その運営母体を募集していた玉城町と、養豚農家の意向がマッチし、平成10年、玉城町産の農産物各種と豚肉加工品が並ぶ官設民営の産直施設「ふるさと味工房アグリ」がオープンした。

里づくりの経過

昭和55年	若手養豚農家６軒が自家配合の飼料工場を共同で整備し、おいしい豚肉の生産に取り組む。
平成8年	玉城町営の温泉施設「玉城弘法温泉」がオープン。軒下での青空市もスタート。
平成9年	養豚農家のグループ６戸と水稲農家１戸が出資をして（有）玉城アクトファームを設立。町内の生産者に呼びかけ、会員を53名に増員。町から農産物処理加工施設の管理運営を受託し「ふるさと味工房アグリ」の事業を開始。（パン、豚肉加工品、体験教室、産直施設。）
平成11年	年間売上げ１億円達成。農産物処理加工施設「手造り工房」の管理運営を町から受託。（惣菜、米加工、漬物加工を新たに追加。）
平成12年	ＪＡを退職された野口好久さんが（有）アクトファームに代表取締役として就任。ＪＡでの企画開発の実績を生かし、売上げを伸ばしていく。
平成15年	年間売上げ２億円達成。 「ふるさと味工房アグリ」「手造り工房」を店舗改装。 「タコハウス」オープン。
平成18年	年間売上げ３億円達成。

現在の活動

■ふるさと味工房アグリ

パン、玉城豚の精肉、豚肉加工品、惣菜、餅菓子類などの手づくりの加工品と、玉城町の農産物を販売。「出来たて」「安全・安心」をアピールするため、店舗から加工工房が見える形になっている。また、農産物を出品する会員 95 名の顔写真を店舗内に貼り、消費者と顔の見える信頼関係を築く。玉城豚のバーベキューハウスも 1 日 120 人～250 人が利用し好調。パン、ソーセージの体験教室は年間延べ 3,000 人が利用。

■米工房

餅、惣菜、漬物の加工工房とその販売所がある米工房では、姉妹提携している沖縄県玉城村の商品も販売。

■タコハウス　　玉城産イチゴを使ったソフトクリームやかき氷、玉城豚入りのたこ焼などを販売。

■体験教室

野菜や果物などの農業体験教室、たけのこ掘りなどの半日体験など各種体験教室を実施。農家と消費者との交流の場となっている。

苦労話

- 5 年前 26 人であった従業員は現在 48 人になっている。加工品目が多く従業員それぞれが主役となって働く中、加工技術の次の世代への伝承が課題となっている。

活動のポイント

- 加工品目が増える中、店舗の運営を任せるため、農協を退職された野口さんに代表取締役就任を要請。野口さんのアイデアで店づくりを進め、成長を続けている。
- 主力のハム・ソーセージからパン、餅、惣菜まで、各種加工品を自社製造販売している。
- 養豚農家の経営規模は、養豚頭数 12,000 頭から 19,000 頭に増加。県下有数の養豚産地が維持されている。
- 玉城町の農業を元気にしようと、町と町民が一体となって取り組んでいる。

将来の展望

- 宅地化が進むなか、農地や里山を残していくため、市民農園の開設や遊休農地を使った定年百姓の制度を立ち上げたい。

連絡先

ふるさと味工房アグリ

住所：度会郡玉城町原 4254-1　電話：0596-58-8686

http://www.amigo2.ne.jp/%7Eact-farm/index.html

しまがはら郷づくり公社農業振興部　（伊賀市島ヶ原）

地元産にこだわったやぶっちゃの市

里の概要

島ヶ原（旧島ヶ原村）は伊賀市の北西部に位置し、北は滋賀県、西は京都府、南は奈良県と三重県を含めた４県の接点になっている。平地が少なく、北・南側は山に囲まれ、特に北側は標高６００ｍの急勾配の山岳地帯である。ほぼ中央を木津川が流れ、古くから、都である京都に至る主要道が通じ（大和街道）、国道 163 号線とＪＲ西日本関西本線が走る。大和、伊勢、山城を結ぶ交通の要衝として栄えた歴史を今に伝える。正月堂での２月の修正会、十一面観音立像が有名。

島ヶ原温泉やぶっちゃの「やぶっちゃ」とは島ヶ原で使う「みんな」ということばから名付けている。

伊賀市

総面積	世帯数	人口
558.17 km2	38,671 世帯	102,957 人

島ヶ原地区

総面積	世帯数	人口
22.95 km2	841 世帯	2,714 人

里づくりのきっかけ

平成６年のふるさと創成１億円資金と旧島ヶ原村の持ち出しで、ふれあいセンターとキャンプ場「やぶっちゃランドゆうゆう鯛ヶ瀬」を設立。平成１５年に旧島ヶ原村で温泉を掘削。平成１６年に農業振興施設「野良じまん」と、温泉施設、健康推進施設を増設した。

里づくりの経過

「島ヶ原村としての農政を考える」という基本姿勢を引き継ぎ、「しまがはら郷づくり公社」で農産物の販売、加工、加工体験や農作業の受委託事業を行う。農産物加工施設は、38 名の従業員が、8 チーム編成で担当。また、農産物直売所「野良じまん」へは、現在、100 名が登録している。

平成 6 年	島ヶ原村（現伊賀市）村営で「やぶっちゃランドゆうゆう鯛ヶ瀬」オープン。
平成 16 年	市町村合併（伊賀市）
平成 17 年	温泉、健康づくり施設「まめの館」、レストラン、農産物加工所「野良じまん」等を増設。

現在の活動

■　農作業受委託事業

高齢化が進む農家の農作業（田植え、稲刈り等）の委託を受け、１６人の兼業農家の若手等で構成する農作業委託部会が草刈りなどを行っている。

■農産物加工棟　野良じまん

□やぶっちゃ市

地元の畑で栽培した野菜や果物、加工所で作ったよもぎも餅、こんにゃく、菓子、きゅうりの粕漬け、梅干などを販売。会員は約 100 名。利用者も以前 60 人程度だったが、現在は 150～250 人/1 日程度。「地元で採れる物はすべて地元のものを。」が原則。

□農産物加工工房（餅、こんにゃく、お菓子）

集落毎に 8 チーム 38 名が編成され、チーム毎に交代で勤務している。製造マニュアルを充実させ各チームで製品のばらつきが出ないように心がけている。主力はよもぎ餅で、地元産にこだわり、よもぎ、もち米ともに 100%地元産を使用。

□農産物加工工房（きゅうりの粕漬け）

昭和 37 年頃にキュウリの生産が盛んで、京阪神の都市部に流通しない曲がった物などを地元の酒蔵（大田酒造）の酒粕で漬け、商品化したのがはじまり。農協の倉庫等を利用している。

□体験工房

米パン、蒟蒻、菓子づくり、餅つき（杵、臼）の体験教室を開催。

■オートキャンプ場（３１サイトあり、夏休みなど予約で満員。大都市圏からの利用が多い。）

■温泉施設

活動のポイント

■地元産にこだわり、地元とのかかわり、地産地消をモットーに、「やぶっちゃブランド」という信頼を得られるよう努力している。

■７つの温泉施設（やぶっちゃ、さるびの、サンピア伊賀、御杖、月ヶ瀬、笠置、針テラス）で温泉協議会を開催しており、清潔、泉質、サービス等のソフト面の検討や情報交換を行っている。

苦労話

■ 加工施設の生産チームによる製品のばらつきをいかに少なくするかという点でマニュアルを充実させた。

■ 最初は生産量がわからず不足や余剰がでていたが、最近はうまく商品管理が出来ている。

■ 朝市に置いている野菜については、残った野菜の引き取りに来てもらえずに腐敗させることもあり悩みのたねである。

将来の展望

１０年前に生産者として集めた地元の主婦達も７０代８０代になっているため、後継者の確保が必要。

連絡先

しまがはら郷づくり公社　　農業振興部

住所：〒519-1711　伊賀市島ヶ原 13680

電話：0595-59-3939

URL：http://www.yabutcha.com/index2.html